

# 珍しい酒もり

小川未明

青空文庫



北きたの国くにの王おうさまは、なにか目めをたのしませ、心こころを喜よろこばせるよう  
 な、おもしろいことではないものかと思おもつていられました。毎日まいにち、  
 毎日まいにち、同じおなような、単たん調ちような景け色しきを見みることに怠たい屈くつされた  
 のであります。

このとき、南みなみの国くにへ使つかいにいった、家来けらいが帰かえつてまいりました。  
 なにかおもしろい話はなしを持もつてこないかと、さつそく、その家来けらいに  
 ご面会めんかいになりしました。

「ご苦勞くろうだった。無事ぶじにいつてこられて、なにより、けっこうの  
 ことだ。南みなみの国こく王おうは、達者たっしやでいらせられたか……。」と、お  
 たずねになりました。

家来は、長い旅をしたので、顔の色は、日に焼けて、頭髪は、雨や、風に、たびたび遇うたことを思わせるように、伸びて乱れていました。

「南の国王は、お達者でいらせられます。そして、毎日、愉快にお暮らしになっていらせられます。帰ったら、よろしく申しあげてくれいとの、お言葉でありました。」と、家来は、申しあげました。

北の国の王さまは、うなずかれてから、

「それは、けっこうなことだ。しかし、ほんとうに南の国王は、愉快に日を送って、おいでなされるか？」と、問いました。

家来は、両手を下について、

「毎日、それはそれは愉快に、日を暮らしていらせられます。南の方は、こちらよりは、ずっと日が長いように思われますが、それでも、国王は、短いといつて、嘆いていられたほどであります……。」と、お答え申したのでした。

北の国王は、不思議のように思われました。自分には、どうして南の国のような、楽しいことがないのだらうかと、かなしく思われたのでした。

「自分は、明けても、暮れても、この単調な景色を見るのに飽きてしまった。やがて、広い野原は、雪におおわれることであらう。どうして、自分には、そうしたおもしろいことがないのであらうか？」と、おっしゃられました。

家は、王さまの顔を見上げながら、

「南の国王も、かつては、お怠屈でいらせられたようでござ

います。しかるに、一度、城下にさまよっています、あらゆる

哀れな宿なしどもをお集めなされて、ごちそうなされ、彼らが見

たり、聞いたりした、珍しいことを、なんなりと言上いたせ

よと、命令あつたために、彼らは、いろいろのことを申しあげ

たのでありました。彼ら、宿なしどもは、北といわず、南といわ

ず、西といわず、東といわず、平常諸方があるきまわつて

いますから、世の中の不思議なことを知っていました。また、彼

らの中には、まれには、学者のおちぶれも、まじっていますの

で、およびもつかない天界のことや、または吉凶の予言み

たいなことまでも申しあげます。……それ以来というもの、こくお国  
 王は、世の中の、いろいろなことに、ご興味をもたせられて、  
 あるときは、ご旅行をあそばされ、またあるときは、ご研  
 究に月日をお費やしあそばされるといふうであります……  
 。」と、申しあげました。

北の国の王さまは、しばらく、頭を傾けて、お考えなされまし  
 た。

「なるほど、みょうなところへお気をつかれたものだ。それで、  
 彼らは、どんな話を言上いたしたか、それをば聞かなかつた  
 か……。」と、王さまはいわれたのです。

家来は、いま、そのことを申しあげようと思つていましたから、

すぐに、

「わたし私が、こちらへかえ帰ります時分には、王は、みなみしま南の島へふね船を出され  
て、その島しまの山谷さんこくに咲さいているらんの花はなをとりはなにまいられまし  
た。その美うつくしいことは、いかなる花はなも比較ひかくにならず、また、その  
かお香りの高たかいことは、谷たにを渡わたつて吹ふいてくる風かぜに、花はなの咲さいている  
ことが知しれるほどです……。また、笛ふえを、吹ふくと踊おどりだす、白しろい  
へびのすんでいるところや、人にんげん間の言葉ことばをまねする鳥とりの巣すのあ  
りかなどを、彼かれらは申もうしあげたので、王おうは、それらをりよう猫ねこをされに  
お出でかけになつたのであります……。」

「それは、さだめしおもしろいことであろう。しかし、そうした  
あそびごとも、南なんこく国だからされるのである。こちらのようにならぬ、



半年は冬、半年は夏というような国には、そんな鳥もすんでいなければ、珍しい花も咲いていない。ほんとうに、こういう国土に生まれたものの不しあわせというものだ。」と、北の国の王さまは、いわれたのであります。

家来は、うつむいて、しばらく考えているようすでありました。「しかし、わが王さま、また、この寒い国には、別な珍しいものがあるでありますよう。一度、この国の宿なしどもを、お招きになり、ごちそうなされたら、また、いかなる珍しい話を、お聞きなさらぬともかぎりますまい。」と、申しあげました。

「それも、おもしろい企てにはちがいないが、この地方の宿なしどもは、そんな珍しい話を持っているようにも思われぬ……。」

と、王さまは、いわれて、すぐに、お呼びなさろうとはなされませんでした。

しだいに寒くなつて、いつしか冬とはなりました。空は、くらく、野原には、風が、枯れた枝にさけんでいました。

王さまは、毎日、このさびしい、寒い景色を見て、日を暮らすことに怠屈なされました。雪が降つてきて、あたりは真っ白になり、やがて、その年も暮れて、正月になろうとしたのであります。

「どんなにか、宿なしどもや、乞食らが、この寒さになやんでいることだろう。彼らは、楽しいお正月を迎えることもできない。なかには、災難から、そうおちぶれてしまったものもある

う。事情<sup>じじょう</sup>を聞いた<sup>き</sup>ら、いずれも、氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>なものばかりのように思<sup>おも</sup>われる。彼<sup>かれ</sup>らからいろいろの話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>くだけでも無益<sup>むえき</sup>ではないであらうから、正月<sup>しょうがつ</sup>には、彼<sup>かれ</sup>らを招<sup>まね</sup>いて、ひとつ盛大<sup>せいだい</sup>な宴<sup>えんか</sup>会<sup>い</sup>を開<sup>ひら</sup>いて、みようと思<sup>おも</sup>う……。」

王<sup>おう</sup>さまは、こんなことを頭<sup>あたま</sup>の中<sup>なか</sup>に描<sup>えが</sup>かれました。そして、その旨<sup>むね</sup>をさつそく、家来<sup>けらい</sup>たちに申<sup>もう</sup>しわたされたのであります。

家来<sup>けらい</sup>たちは、いずれも、そのお考<sup>かんが</sup>えなされたことが、たいへんによいことであり、また、おもしろいことだといわぬものはなかつたのです。

「いや、北<sup>きた</sup>の国<sup>くに</sup>には、また、南<sup>みなみ</sup>の国<sup>くに</sup>と違<sup>ちが</sup>った、いろいろの不思議<sup>ふしぎ</sup>なこと、珍<sup>めづら</sup>しいことがあるであらう。はやく王<sup>おう</sup>さまに、宿<sup>やど</sup>なしど

もや、こじき 乞食もうの申しあげることを自分じぶんらも聞ききたいものだ。」と、  
みなみくに 南つかの国へ使つかいにいって帰かえつてきた、家来けらいなどはいったのでありま  
 す。

しかし、北きたの方ほうの王おうさまは、なんとなく、それほどの期き待たいをさ  
 れていませんでした。いよいよ王おうさまが宿やどなしどもや、乞食こじきども  
 を、お招まねきなされて、盛せい大だいなご宴えん会かいを開ひらかれるというふれが、  
 いたるところに、はられましたから、すきな酒さけも飲のめずに、貧びん乏ぼ  
うくる 乏ひとに苦くるしんでいる人ひとたちは、しかも、王おうさまのお召めしで、たく  
 さん好すきなものをいただけるというのだから、たいへんにありが  
 たいことと思おもつて、その日ひの至いたるのを喜よろこんで待まっていました。  
 ここに、だれもゆかないような、さびしい海かい岸がんに、波なみで打うち

上げられたものか、こわれた船ふねがある、その中なかに住すんでいる老ろうじ人じんがありました。この老ろうじん人は、いつごろから、そこに住すんで

いるのか、だれも知しつたものがありません。そして、ようすから見て、どうやら、この地方ちほうの人ひとではないようにも思おもわれました。

ある日ひ、この老ろうじん人は、村むらの方ほうへ出でてゆきました。そして、王おうさまが宿やどなしどもや、乞食こじきたちをお集あつめなされて、正しょう月がつのご宴えんを開ひらかれるというこを聞きいたのです。

「私わたしも、ぜひまいつてみたいものだ。」と、老ろうじん人はいいました。どこからともなく、たくさんあやの怪あやしげなふうをした人にんげん間げんが、城下じょうかへ集あつまってまいりました。毎日まいにち、毎日まいにち、雪道ゆきみちをあるいて、遠とおくから、ぞろぞろと入はいってきました。

やがて、正しょうがっ月がつとなり、その日ひとはなつたのです。さすがに、  
 広い、大きな、御殿ごてんへも、これらの人ひとたちは、はいりきれなかつたのでした。しかたなく、雪ゆきの上うえへ、むしろを敷しいて、その上うえに  
 すわらなければならなかつた。

王おうさまのお言葉ことばで、みんなに、上じょうとう等とうの酒さけがふるまわれまし  
 た。そこで、その日ひばかりは、特とく別べつに無礼ぶれいのことのないかぎり、  
 彼かれらはくつろいで飲のんでも、いいことのであつたから、みんな  
 は、上じょうきげん機嫌げんになつてしまいました。

そのとき、家来けらいは、立たち上あがつて、彼かれらに向むかつて、  
 「王おうさまのお言葉ことばである。いままで不思議ふしぎと思おもつたこと、珍めづらしい  
 と思おもつたことがあつたら、だれでも、そこで話はなすがいい。王おうさま

は、この世よの中なかの不思議ふしぎなこと、珍めずらしいことを知しりたいと仰おほせらるるのだ。」といいました。

いい機嫌きげんになって、くつろいで話はなしをしていました彼かれらは、急きゆうに、静しずかになってしまいました。そして、たがいに、顔かおを見合みあわしているばかりで、立たち上あがって、不思議ふしぎなことや、珍めずらしいことを語かたろうとするものがありませんでした。

「なにも申もうしあげずに、だまっているのは、かえって、無礼ぶれいに当あたるぞ！」と、家来けらいは、また、大おおきな声こえを出だして、みんなを見みまわしながらいいました。

そのとき、みすばらしいふうをした一人ひとりの男おとこが、立たち上あがりました。

「ある寒い晩のこと、私は、森の中で、眠れずに目をさましてしまいました。すると、真夜中ごろのこと、すさまじい音がして、星が、森の中へ落ちました。私は、星が落ちたのを見たことは、はじめてです。夜の明けるのを待つて、昨夜、星の落ちた場所へいつてみますと、土の中に底光りのする石がうまつていました。掘り出してみると、さるの顔に似た形をしていました……。」

このとき、王さまは、

「その石をどうした？ ……まだ、持つているか。」といわれました。

「あまり、気味のいいものでありませんから、海の中へ投げ捨ててしまいました。すると、その日から三日間ばかり、海があれ



たのであります……。」「と、みすぼらしい男は、答えました。

「やれやれ、そんな珍しいものを捨てて惜しいことをしたな。」  
と、王さまは、いわれたのです。

つぎに、また、みすぼらしいふうをした、ほかの男が立ち上りました。みんなは、その男が、どんな話をするだろうかとながめていました。

「北の小さな町へ、山から、白くまが出てきたときは、町では大騒ぎをしました。町の人は、どうしても、その白くまを殺してしまわなければならぬといって追いました。」

白くまは、どんどん逃げてゆきました。海は凍つて、すでに氷の原となっていました。くまは、氷の上を走ってゆきました。す

ると、沖おきの方ほうは氷こおりがわれていて、その間あいだに、黒くろい島しまが現あらわれていました。くまは氷こおりのかたまりの上うえを飛とんで、その黒くろい島しまの上うえへ登のぼつてしまいました。町まちの人々ひとびとは、そこまでは、ゆくことができま  
せんでした。しかし、白しろくまの上あがった島しまは、くじらの背せだつた  
のです。そのうちうちに、くじらは、白しろくまを背せ中なかに乗のせたまま、沖おき  
の方ほうへだんだん動うごいていったのでした……。」「  
「それは、珍めづらしい話はなしだ。」と、王おうさまは、笑わらわれました。  
こんどは、彼かれらの踊おどりや、唄うたを聞ききたいものだど、王おうさまは、  
仰おほせられたのであります。

「王おうさまのお許ゆるしであるから、唄うたをうたいたいものはうたい、踊おど  
りたいものは、おどるがいいぞ。」と、家来けらいは伝つたえました。

彼らは、いろいろの唄をうたい、さまさまの踊りを、ごらんに入れたのです。王さまは、ひじょうに、ご満足なされて、「ときどきこれから、こういう催しをすることにいたそう。」といわれました。そして、御殿から、外の広場へと出られて、みんなが、雪の上でもうたい、踊っているのを、ごらんぜられたのであります。

ちようど、このとき、一人の老人が、大きな袋のようなものを脊負って、破れた、マンドリンに合わせて踊っていました。その踊りも変わってれば、また、マンドリンの音も、さびしいうちになんともいえない陽気なところがあふ不思議な音でした。

「あの大きな袋の中には、なにがはいっているのか？」と、家来

におたずねになりました。

家来けらいにも、そればかりは、わかりませんでしたから、かたわらの人々ひとびとに聞ききますと、やはり、だれも知しっているものがありま  
せん。

「いや、たぶん、きつと珍めづらしい宝たからもの物ものがはいつているのだろう  
……べつに、問とわなくともよい。」と、王おうさまは、笑わらわれて、あ  
ちらへいつてしまわれました。

やがて、踊おどりが終おわると、乞食こじきの一人ひとりが、おじいさんに、その  
袋ふくろの中なかには、なにがはいつているかと、たずねました。

おじいさんは、耳みみが遠とおいのか、それとも言葉ことばが通つうじないのか、  
ただにやにや笑わらっているばかりです。宿やどなしどもの一人ひとりは、おじ

いさんの氣きのつかない間あいだに、袋ふくろのすみちいに小さな穴あなを明あけて、その中なかのものを見みようとなりました。すると、中なかからは小粒こつぶの黒くろい種子たねのようなものが、こぼれてきました。

「なんだ、つまらない！」と、そのものは、つばをしました。

いつしか、日ひが暮くれかけたので、酒さかもりも終おわりを告つげ、みんなは、ふたたびどこへともなく散ちつてしまつたのです。

おじいさんは、大おおきな袋ふくろを脊せ負おつて、広ひろい雪ゆきの野原のはらを通とおつて、破船はせんの横よこたわる海かい岸がんを指さして帰かえりました。袋ふくろのすみちいに、小ちいさな穴あなの明あいていることに氣きづかなかつたから、おじいさんが歩あるくたびに、黒くろい種子たねが、ぼろぼろと雪ゆきの上うえにこぼれたのでした。

ちらちらと、雪ゆきが降ふつてきて、こぼれた黒くろい種子たねをみんな隠かくし

てしまいました。おじいさんが、袋の軽くなつたのに、はじめて、  
 気がついたときは、どうすることもできなかつたのであります。

長い冬が、いつしか過ぎて夏がきました。そのとき、いままで

さびしかつた広い野原に、急に浮き出たように、紅・黄・白・紫、

いろいろの珍しい花が、絵のごとく美しく咲き乱れたのでした。

世界じゆうを、あちら、こちら、歩いて、珍しい花の種子を集

めて、おじいさんは東の方の故郷へ帰る途中で、この海岸

で難船したのでした。

王さまは、その話を聞かれると、気の毒に思われ、厚くおじい

さんをいたわられて、船に乗せて故郷へ帰してやられました。

しかし、その花の野原は、いつまでも、王さまの心をなぐさめた

のであります。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「珍《めずら》しい酒《さか》もり」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 珍しい酒もり

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>